　　　　　　　　　この文はIME2010（仏教用漢字が追加されている）で書きました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2015-10和訳　西　泰宏

　　　　（岩波文庫）訳注：宇井伯寿

　　　　　　　　　　道元禅師が宋の寶慶年中に其師天童如浄禅師から親しく聞いた

所を書き留めて置かれたのを、弟子の懐弉禅師が筆写して伝えた

もの（凡例より）。永平道元1200~1253、天童如浄1162~1227。

道元禅師の聞き書きは 1225～1227の間。懐弉禅師が師の遺品の中から見出して書写したのは 1253年。道元禅師は当時（＝宋）の公用語だけでなく天童山のある浙江省の方言まで勉強していた。当然、宝慶記の会話はどちらかの中国語でなされ、日本語でメモされていたと思う。

　　　　　　　　　　資料として全久本（懐弉禅師直筆）、宝慶本、明和本がある。

　　　　　　　　　　懐弉禅師が師の道元禅師からの聞き書きしたのが「随聞記」。道

元禅師が師の如浄禅師から聞き書きしたものが「宝慶記」。「宝慶記」は自分の記憶の補助としてメモされ、弟子に見せるためのものではなかった。「随聞記」は初めはメモであっても、自身で編集した時は文書として後輩にも読めるように書き直されたのではないか。「宝慶記」を読んでいると「随聞記」の原典に出会うのはもちろんだが、文によっては、あまりに専門的で、かなりの仏教の学力を必要とする。今の訳者には力及ばず解からない記述がある。初心者にはそこまで必要とは思われないので、エス訳はしない。

**Notoj Lernitaj de Ĵuĝjng**

Esperanten Zefiro 2015-10

Zenisto Doŭgen (1200~1253) lernis la zenon de la majstro

Ĵuĝing (ĉino) dum 1225~1227. Li notis lian instruon, kaj la

sukcedanto de Doŭgen, t.e. la zenisto Eĵoŭ ordigis la notojn kaj skribe postlasis ilin al ni.

Mi ne tradukos ĉi tiun Esperanten, ĉar la artikoloj foje tro specialistaj, des pli embarasos komencantojn.

**1.**（私こと）道元は年少の時、菩提心を起こし（13歳比叡山に入る）、諸国に真の導師を求めて、いくらかは縁起律（＝仏教理論の根本）を理解できるようになったが、まだ仏法僧の本当のあり方を知らず、いたずらに教義の表面的な理解にとどまっていた。その後、千光禅師（＝栄西）の門下にはいり、臨済宗の禅に出会った。今、師の明全禅師に従って宋（＝中国）に入国した。万里の航海には、浮雲のようなこの身を波浪にまかせて、ついに大国・宋にたどりつき、（切望した）本場の道場に出席することができた。これは前世に積んだ功徳の結果としての幸福であろうか。

〔道元〕「ご住職（＝如浄禅師）、（私は）遠方の、外国に住む若年者です。（不遜ではございますが）願うところは、時々に私服のままでもご方丈（＝住職居室）に伺い、わからないところを質問させて頂きたく、お願い申し上げます。無常迅速・生死事大と申します。時は人を待たず、この聖なる時を失えば必ず後悔することでしょう。どうか慈悲をもってお許しいただきますよう伏してお願い申し上げます。」

〔如浄〕（道元）君は、只今より昼夜の別なく、正式に袈裟を着けているか否かにかかわらず、たとえこの方丈に来てでも質問することを許す。」老住職は、父親が子の無礼を許すように（私の願いを）許してくれた。

　　　　　　　「（道元）君」と訳した原文は「」。名前の下の文字に子を添えると愛称になる。日本における道元の師・禅師を「全和尚」と書くのも敬愛すべき指導者を示す。－訳者

**2.** 宝慶元年 (1225)七月二日　初めて方丈を訪れる。

　〔道元〕今言われている教外別伝と祖師西来とはどう理解すべきでしょうか？

　〔如浄〕釈尊の広大な道には内・外（＝教外）と言うことは無いが、（我が国・中国への）仏教の初伝 (AD67)以来の教え（＝経典、論書）の他に祖師西来（＝菩提達磨師が中国に来た）ということがあって、それを教外別伝と言う。世界に２つの仏法があるはずもないが達磨師以前には仏教者の生活は伝えられていても、まだ中心となる何かがなかった。達磨師が東土（＝中国）に来たと言うことは、民衆に統治者が出来たと言うことと同じで、それによってすべてに統一的な秩序が生まれたに等しい。

**3.** 〔道元〕（このところ、近くの寺々を回ってみましたが）ご住職方のおっしゃるには「聞こえていても（心に）聞かず、見えていても（心に）見ず、要するに（物事を）分別判断しない（＝無し・原文）。これが仏道の（唯一の）第一点である」と。（仏教では物事に上下、好悪などの自己判断をしない。－訳者）「したがって、（修行指導に）拳や払子を立てたり、一喝、棒で打つ（＝禅宗の宗風、他派から見れば奇妙な振舞い）などは無用であり、（道教のように）占いで人々の救済を計る必要もない」など。結局どれが仏教の教えで、どこから始まるのか、何を学ぶのか、何が目的なのか。また、前世の業が今に反映されることなど無いとも聞きました。これらのことは（本当に釈尊の）教えなのでしょうか？

　　　　　　　道元禅師ははじめに天童山に登った。しかし、そこでは満足できる指導者に巡り会えず、付近の寺々を訪れて真の指導者を探した。後に、天童山に新しい住職が赴任してきたと聞いて再びそこを目指し、如浄禅師に会うことができた。

　　　　道元禅師が得ていたのはまったく雑然とした知識であって、仏教そのものを疑うほど混乱していた。したがって最初の質問が仏教者らしくないものになってしまっている。－訳者

　〔如浄〕もし、前世からの業の相続が無いとすれば、それは断見（＝人は、死ねばそれで一切は終わり、何も残らない。したがって道徳・倫理などは無意味）であって仏教はそのようには考えない。

　　　　　　　仏教では霊魂の不滅ということはない。ただ前世で積んだ功徳や悪業に

よって、次の人生で安楽であったり、償いを求められる。－訳者

仏教の教えには他の宗教からの引用は必要ない。もし前世がなければ、現世はない。実際に現世があるのだから、なぜ前世がないと言えるのか。

　　　　　　　現世は前世の悪業を解消するためにあり、悟りを得られれば苦の欲界をのがれて、輪廻は終わる。－訳者

我らはもとより釈尊の弟子である。他の宗教を同等に扱うことはない。（道教を引用したことに対する回答。－訳者）また、（分別判断しないと言う第一の手法はあっても）修行者にとって第二はないことは釈尊のひとつの見事な教法である。（救済については）修行者に何の利益もないということではない。もし利益が無いとすれば、先達に話を聞く意味がないし、（先達は）仏教者としてその名を残すこともなかっただろう。ただ（日常普通に）見聞きしたことを知るだけで、（仏道に）釈尊を信じて研究する（＝弁道）こともなく、実際に試して証明する（＝修証）ことが無ければ（その利益はない）。善業の果報で楽に生き、苦の無い人でも仏道を心がけることはある。彼らにも見聞きして知る機会は無いと言うことはないのだから。（それを基礎として、さらに追及するものを修行者という。）

**4.** 〔道元〕古今の知識人は「魚は水を飲むので、水が暖かいか冷たいかは自分でわかる（＝冷暖自知）と言います。この、自分で知ることが悟り（＝覚）であり。これが菩提である」と。私はそうではないと思います。もしそれが正しいとすれば、一切衆生にはみんな自知があり、したがってみんなが悟りを得た如来ということになります。これをある人は「その通り。一切衆生は（縁起によらない）生きた如来なのだ」と言います。また別の人は「必ずしもみんなが如来ということではない。その理由は、自分の悟りは本来持ち合わせている智慧である（＝自覚性智）と知る者は如来と言えるが、それを知らないものは如来ではない。」と。これらの説は仏教の教えに叶うものでしょうか？

　〔如浄〕一切衆生がもともと仏陀であると言うのは（縁起律に従わなく、原因無くして結果がある。これは仏教ではない。）と同じことだ。自分の心とその行い（＝我・我所）を仏陀のそれと同じとして、得てもいない利益を得たといい、まだ至らない悟りに達したと思う者は僭越者というほかはない。

**5-1.** 〔道元〕修行者が研鑽（＝工夫弁道）を積む時、どんな心構えと生活（＝行住座臥）であるべきでしょうか？

〔如浄〕菩提達磨師が来たのだから、仏教のすべてが（親しく）教えられている。

初心者が修行する時には

　1. 長患いするべからず。　修行が中断する。－訳者

　2. 旅行するべからず。　修行が中断する。－訳者

　3. 読経は多くするべからず。　経は参考書であって読経は修行ではない。－訳者

　4. 口争いは多くするべからず。　興奮と怒りは修行の敵。－訳者

　5. 生計のための手配を多くするべからず。　俗生活ではない。－訳者

　6. 五辛（＝ネギ、ラッキョウ、ニラ、ニンニク、ハジカミ）を食べるべからず。

　　　　　　　五辛については資料によりいくつも組み合わせがある。－訳者

　7. 肉を食べるべからず。　高カロリー食は不可　－訳者

　8. 多く乳（牛乳・ヤギ乳？）、蜜などを食べるべからず。　22.参照。

　9. 酒を飲むべからず。

10. 托鉢以外のものを食べるべからず。　「不浄食」は邪命食に同じ。

11. 歌舞音曲などの声を聞くべからず。

12. 歌や舞姿の女性を見るべからず。

13. 狩猟・漁業・屠殺されたものなどを見るべからず。

14. 卑しく醜いものを見るべからず。　但し書には「婬色」となっている。－訳者

15. 国王、大臣などに親しくするべからず。　政治は妥協、信仰は純粋。－訳者

16. 生で硬いものを食べるべからず。　消化の問題か？　－訳者

17. 垢のついた着物を着るべからず。　自堕落と妥協　－訳者

18. 屠殺場などを訪ねるべからず。

19. 古くなったサザンカの茶、癩病の薬（天台山にある）を飲むべからず。

20. 桑の実（？）などを食べるべからず。原文の「」は解明されていない。－訳者

21. 名誉や利得に触れるなかれ。

22. 多く乳や乳製品、蜜などを多く飲むなかれ。

　　　　　　　8.に近似。原文の「蘇」は単独ならヨーグルト・バターの類、「蘇蜜」も乳製品らしい。高カロリー食？。－訳者

23. （偽坊主）、（馬鹿）と親しく交わることなかれ。

　　　　　　　原文のルビ「センダ、ハンダカ」から連想されるのはこれら。パンダカを釈尊だからこそ悟りに導けた。後注にある「黄門（政府高官）、二根者」では意味が分からない。－訳者

24. 梅干し、乾栗を食べることなかれ。

25. 甘い木の実を多く食べることなかれ。

　　　　　　　３種の木の実が記されているが、今では知られていない樹なので詳述の必要はない。後注には多食すれば酔うとか熱を出すと書かれている。若者には空腹の足しになったのではないか。－訳者

26. 砂糖など多くとることなかれ。

27. 綿入れ（＝厚着）を着ることなかれ。常に綿製品を用いること。

　　　　　　　絹などの高級品は用いない。－訳者

28. 軍隊の食事をとることなかれ。

　　　　　　　兵士は高カロリー食かもしれない。－訳者

29. 出向いて喧噪の音、家畜の群れを見物することなかれ。

30. 出向いて大魚、大海や奇妙な絵、見世物を見物することなかれ。ただ、青い山、谷川の水（＝「青山渓水」）に親しむべし。

　31. もっぱら昔の賢者の語録を見て、みずからを顧みよ（「古教照心」）、また究極の正しい経典（「了義経」）を学ぶべし。

32. 研鑽を積む修行者は常に心を洗う（「洗足」）べし。身心が落ち着かない時は、すぐに（梵網経の）菩薩戒の序文を黙読せよ。

　　　　　　「洗足」とあるが、常に路上にある当時の修行者には、物理的に泥の付着

があると思われる。しかし日本語がそうであるように、足を洗うことは別

の意味に使われていたかもしれない。たとえば、客塵煩悩と言う言葉があ

る、煩悩が外から来るものならば、洗い落とせる。－訳者

**5-2** 〔道元〕菩薩戒とは何でしょうか？

〔如浄〕今、修行者・隆禅（日本人）が唱えている戒経である。

　小人に交わることなかれ。

**5-3** 〔道元〕小人とはどんな人ですか？

〔如浄〕欲の多い人のことだ。

虎の子、象の子、猪、犬、猫、狸などを飼育してはならない。今、あちこちの寺で

住職が猫を飼っているが、まったく許されることではない。仏道に暗い者のやることだ。

およそ16の禁止律（涅槃経）は釈尊の制されたもので、つつしまなければならない。

身勝手なことをして、それを習慣にしてはならない。

**6.** 〔道元〕首楞厳経と円覚経とは、在家の人がこれを読んで、インドから来た正当な経典だと思っているようですが、私・道元はこれを読んで判断するに、他の大乗経典とは同じではないと思いました。まだそれらの言おうとするところがよくわからないのですが、他の経典に比べて劣る記述があるし、勝る主張も見受けられません。あちこちに六師外道（＝仏教以外の宗教）の見解に同じこともあります。結局どう決めるべきでしょうか？

〔如浄〕首楞厳経については昔から疑う人がいる。あるいは後代の作品ではないかと。

歴代の継承者たちはこの経典に触れていない。近頃の愚か者どもはこの経を読み親しん

でいるようだ（が不可解なことだ）。円覚経も同じ文体で書かれている。

　　　　　経典というものはすべて釈尊の直説であると思われていたので、この

両経は「後代の作品」ということで真説ではないという評価をしている。

しかし後注によると、道元は後に評価を変えている。－訳者

**7.** 〔道元〕煩悩障（煩悩による修行の妨害）、異熟障（因にふさわしくない果による）、業障（日常の身口意の業による）などの障は釈尊の説でしょうか？

　〔如浄〕竜樹（菩薩）などの高僧の説はすべてその通りに保持し、別の解釈をしてはならない。業障は丁寧に修行すれば必ず消える。

　　　　　　　この返答では「障」は釈尊の説ではないことになる？。－訳者

**8.**〔道元〕因果律は必ずあるものでしょうか？

〔如浄〕因果律を排除したり、無視すること（＝撥無因果）はできない。大師は言った「因や果は空であっても、因果律そのものは絶対の真実である。これを無視するとかえって禍を招く」と。もし、因果律を無用と言うなら、たとえば、その中の（仏教の目指す）善因を無意味にする。これでは釈尊の弟子と言えるだろうか。

**9.**〔道元〕近頃、人に知られた禅者が長髪長爪にしているのはどんな根拠よるのでしょうか？比丘と呼ぶには俗人そのままだし、俗人と呼ぶには、これはハゲの子供でしかありません。どこでも正法・像法の間、仏弟子はこのようではありませんでした。いかが思われますか？

　　　　　　　この１３世紀当時は末法の世と理解されていた。－訳者

　〔如浄〕これ、まったくの畜生と言わなければならない。仏法の浄海の中の屍だ。

　　　　　　　後注によれば、禅は普通の仏法とは違うと思うことから、逆に髪と爪を伸ばすという奇異の風習が生まれたのかもしれない、と。－訳者

**10.** （質問なし、または省略）

　〔如浄〕「君は私より若いが、伝統に従う気持ち（＝心）が強い。すぐにも深山幽谷に住んで（自分の中にある）悟りの芽を育てなさい。必ず昔の賢人たちの悟りに達するだろう。」それを聞いて私・道元は立って行き禅師の足元にうずくまり礼拝した。禅師は「礼拝する者も、される者も本質は空（＝今の身分・立場に関係ない）である。また、（誰にでも、努力すれば得られる）感応道交（＝仏と人が心を通わせること）は論理ではない（それ以外の道である）」と唱え、それから禅師は先師たちの言葉や行動を語り聞かせ、私は感激に涙を流しながら聞くしかなかった。

**11.** （質問なし）

〔如浄〕日頃のこととして、人と行動を共にする時は腰ひもを強く結び置くこと。少々時が過ぎても締め直す手間がはぶける。

　　　　　　　内衣のひもを結び直すのは、人前では不作法になる。－訳者

**12.** （質問なし）

　〔如浄〕修行者が座禅堂で配慮することの第一は、ゆっくり歩くことである。近頃あちこちの寺の住職といえども、これを知る人はきわめて少ない。歩きは（ゆっくりした）呼吸に合わせて進める。足によろめきを感じるが、前屈みにならず、反り返ることなく歩く。他の人からは、ただ立ち止まっているように見えること。肩や胸を揺らせてはいけない。

　禅師は居室の中で歩行して、道元に見せてくれた。また「この歩き方を知るのは私一人だけだ。その中、試しに近くの寺々の住職にも質問してみるといい。誰一人これを知る者はいないだろう。」と。

**28.**、**46.**を参照。この歩き方をという。－訳者

**13.** 〔道元〕仏教は性善説（＝善性）でしょうか、性悪説（＝悪性）でしょうか、それとも不定説（＝無記）でしょうか？

　〔如浄〕仏法（＝禅）は３説を超越する。

**14.** 〔道元〕釈尊から営々と伝わるこの大道は（伝統の）片隅に置かれるべき小さな宗派ではありません。どうして禅宗などという（多くの宗派の中のひとつの）宗派なのでしょうか？

　〔如浄〕この大道をみだりに禅宗などと言ってはならない。今、禅宗と呼ばれるのは運が悪かったのだ。頭を丸めた愚人どもが言い始めたことなのだ。昔の賢人たちは知っている古い時代のことなのだ。君は石門（寺）の「林間録」を読んだことがあるか？　―いえ。まだ読んでいません。―　一通り目を通せばよい。「林間録」の記述は正しい。おおよそのところ、釈尊の教外別伝（＝禅）は摩訶迦葉に受け継がれ、次々と続いて第28世（菩提達磨）が、中国に渡って第６世（曹渓）さらに現在まで。自分・如浄（第50世）は仏法の総代である。この世界で並立する者はいない。今、35本（？）の経・論を論考してそれぞれに宗派を立てている者たちは、みんな釈尊の信奉者一団である。しかし信奉者とは言え、その間の関係には親疎、高低がある。

　　　　　　　釈尊以来の伝法祖師については、蛍山禅師の「伝光録」に書かれているが、その元になったのは「林間録」ではなかったか。－訳者

　　　　　　　釈尊の冥想は止観だったと思われる。－訳者

**15-1.** 〔道元〕もし釈尊の信奉者であれば、彼らも菩提心を発して本当の指導者（＝禅の師）を訪ねることはできます。（しかし）どうして、彼らはそれまで（長く学んできた）学問を捨ててまで、禅修行者の集団に加わり、しかも昼夜の別なく禅の修行に励むのでしょうか？

　〔如浄〕（昔から）いつでも、どこでも彼らはそれまでの学問を捨てて来るのである。たとえば、（宮廷では）廷臣が丞相（＝宰相）に就任する時に諌議大夫（＝国王の政治が間違っていると思った時には、直接苦言を呈してやめさせる資格を持つ顧問）を兼ねることがなくても、その子供（＝後継者）には諌議の立場で教育する。仏の道もまた同じである。諌議大夫ほどの（清廉な人柄でもって）丞相に任命されても、丞相の立場では諌議を言わず、諌議大夫としては丞相の仕事をしない。（彼らに）必要なことは治国安民（＝国を治め、国民を安寧に保つ）という忠義である。忠義ということでは（どちらの立場でも）心はひとつ、二心に分けるわけではない。

　　　　　　　このたとえはわかりにくい。－訳者

　　　　　　　後注には「ここの趣意によって、禅が教を排するのではない」と。

**15-2.** 〔道元〕諸方の住職の説くところを見れば、（彼らが）今もって師家のいう「道」を知らないことは明らかです。今、私には、師家は釈尊の正統な後継者であって、現在の法主であることが明らかになりました。全世界の指導、仏縁ある人々の教化、すべては師家（一人）のつかさどるところであって、二人の法主はあり得ないことです。

　〔如浄〕君の言う通りだ。インドでは（一人相続であって）二人に継承されることは無かったし、この国でも第六祖までは一人だけに法と衣鉢を継がせた。さかのぼれば、仏教は釈尊を根本とする。

　　　　　　　第６祖以後、衣鉢は手元に留め、法は複数の弟子に認可された。

禅の法脈図によると菩提達磨はインド第２８祖、また中国第５祖（＝第６世）に２人の伝法者がある。中国では菩提達磨を初祖とし、如浄は第５０祖、道元は第５１祖（日本では曹洞宗の初祖）になる。－訳者

**16.**（質問なし）

　〔如浄〕座禅は身心脱落（＝身心の解放）であり、（儀礼的な）焼香、礼拝、念仏、（＝儀式）、（＝経典を黙読）をしない。ただひたすらに座禅に努める。

**17.** 〔道元〕身心脱落とはどういうことでしょうか？

　〔如浄〕身心脱落は座禅による。ただひたすらに座禅すれば、五欲（＝色・声・香・味・触による欲望）を離れ、五蓋（＝執着・怒り・憂鬱・昂ぶりと後悔・疑い）を除くことができる。

**18.** 〔道元〕五欲・五蓋のことは従来の所説に同じですね。すなわち大乗・小乗の修行者のことですか？

　〔如浄〕釈尊の弟子であれば大乗小乗のどちらも嫌ってはならない。もし修行者が釈尊の教えに背くなら、釈尊の弟子とは言えないだろう。

　　　　　　　大乗経典は釈尊の直説だと当時は理解されていた。小乗の経典は直説であっても程度の低い教えとされ、注目されることは無かったが、如浄禅師は小乗（＝阿含経典など）を非難していない。道元禅師もその考えを踏襲して、正法眼蔵は阿含の教えを含んでいる。－訳者

**19.** 〔道元〕近頃の疑い深い者の言うには、三毒（＝貪り、怒り、無知）は釈尊の教え、五欲は（大乗の）歴代祖師たちの教えであり、もしこれらを無視すれば、これは身勝手な選択であり、小乗と同じではないか、と。如何ですか？

　〔如浄〕もし三毒・五欲をそのまま残せば、釈尊時代の仏教以外の他の宗教の信者に等しい。仏教徒は、一欲、一蓋でも克服すれば巨大な利益で、釈尊に会いまみえる資格がある。

　　　　　　　後注によれば、この一欲・一蓋の克服は如浄、道元禅師の禅に対する考え方を示している。すなわち、煩悩の一つでも断ち切れるならば、それは仏となることに等しい。禅は成仏のためにはすべての煩悩を消さなければならないと要求しているわけではない、と。－訳者

**20.**〔道元〕（中国の）長沙和尚と皓月供奉（800年代の禅者）が業障は本来は空であることを話し合っています。このことで私には疑問があります。もし業障が空であれば残りの二つ、異熟障と煩悩障もまた空ではないか、ただ業障だけの空か不空かを論じるだけで済むものでしょうか。すなわち、皓月が「本来空とは何についてのことか」と問い、長沙が「業障がそれだ」。皓月「業障（の本質）とは？」長沙「本来の空がこれである」と。この長沙の言うことは正しいのですか？　仏法が長沙の言葉通りなら、どうして（修行者が）仏として世に現れ、あるいは祖師西来ということが起こるのでしょうか？

業が空であり障害にならないとすれば、仏として尊敬される人はいないし、菩提達磨が、要請されたわけでもないのに、艱難を乗り越えて中国へ来て、仏教者の修行を教えたことも無意味になる。道元もまた危険な海を越えてまで真の教えを乞う旅に出ることもなかった。－訳者

　〔如浄〕長沙の言うことはまったく正しくない。彼は三時業を知らないのだ。

　　　　　　　三障については **7.** を参照。

　　　　　　　三時業；人の身口意によって作られた業の余波は因果律として、その人の生きている間（＝一時）、あるいは次の生涯に（＝二時）、そうでなければさらに後の生涯（＝三時）で当然の結果をもたらす。善悪ともにその業に応じた人生となるであろう。－訳者

ほとんどの場合、因果は道徳について語られている。－後注

**21-1.**〔道元〕昔も今も善知識（＝賢者）は、了義経（＝完成された経典）を読め、不了義経（＝不完全な経典）は見るな、と教えます。この了義経とはどんなものですか？

　〔如浄〕了義経とは本事（＝釈尊の弟子の過去世の因縁）、本生（＝釈尊の過去世の因縁）などを説く経典である。その人の過去の因縁、時、所、姓名、寿命、氏族、功績など一切を漏れなく記述したものを了義経という。

その僧の師、嗣、同僚、入信の事情、悟りの機会なども記してある。

－訳者

**21-2.**　〔道元〕たとえ一言半句でも（仏教の）教義を説き了（＝終）わる経典を了義経と言うべきではないでしょうか？　どうして人の経歴をただ記述したものを了義と言うのでしょう。その記述が圧倒的な雄弁であったとしても、教義を明らかにしないものは不了義経と言うべきでは、と思います。

　〔如浄〕君の言うことは間違っている。釈尊の言説はどれをとっても道理を尽くしているからだ。尽くしていないものはない。聖黙（＝不要な発言をしない）も聖説（＝人に説明する）も皆釈尊のなさったことだ。だから説法や食事、生天（＝天上界に生まれた）、下天（＝そこから下界に降った）、出家、苦行、降魔、成道、托鉢、涅槃、すべて釈尊のなさったこと。その場に立ち会った民衆には大きな利益があった。だからこれらは皆了義なりと知らなければならない。その行動の中でそのことを説き終わる。これを了義経と名付けるのだ。すなわち、これが釈尊の教え方なのである。

　〔道元〕お教えに従います。これが（本当の）釈尊の教え、祖師方の道なのですね。あちこちの住職、日本の古くからの慣習には正統性がありません。私が今まで知っていたことは、まだ完成していないものを完成したものと思いこんでいたのでした。ようやく師家のもとで、はじめて了義の向上のために了義経があることを知りました。このような機会には何度転生を繰り返してもほとんど巡り会えるものではありません。（幸いにして私は今生で会うことができました。）

　〔道元〕昨夜の講座で、師家は「礼拝する者も、される者も本質は空である。感応道交は論理ではない。」（**10.**に同じ）とお教えくださいました。深い意味があるのでしょうが、そこまではわかりません。（私のような）知恵の浅い者でも疑問があります。すなわち、感応道交は教家（＝経典を主とする宗派）でも言及しております。彼らと師家の感応道交は同じなのでしょうか？

　〔如浄〕まず、感応道交の意味を知らなければならない。感応道交ということがなければ覚者と言われる人物は世に現れないし、祖師（＝菩提達磨）が西から来る必要もなかったろう（菩提達磨は感応道交を教えるために来た）。また、教家を非難するべき対象としてはならない。従来の信仰を否定するならば、その時は丸い着物（着物は方形の布をつづり合わせて作るのが普通）、四角い茶碗（茶碗は丸い鉢形にできている）を使うことになる。そんなことにはなっていないのだから、従来のものを否定することはない。まず第一は感応道交そのものを知らなければならない。（それを経験することが先決である。）

23. 〔道元〕先日、阿育王山の住職・大光禅師にお会いした時、「釈尊の教え下さった道と、教家の教義は火と水のように異質であり、天と地のようにはるかにへだたっている。もし、教家に賛同するならば、それは釈尊の教法ではない」と言われました。この大光禅師のおっしゃることは正しいのでしょうか？

　〔如浄〕これは大光一人だけではなく、諸方の住職たちも同じことを言っている。彼らは教家のすべてを見極めたのか？どうして釈尊の教えの深奥を知り得たのか？彼らは勝手な説を立てる、いかがわしい住職に過ぎない。

　　　　　　　親しいものにだけに告げた如浄禅師の自負心。－訳者

**24.** 〔道元〕昔から文殊（菩薩）の結集（＝編集）と阿難陀の結集と二つあったとされています。大乗経典は文殊の結集から発し、小乗は阿難陀の結集から生まれたとされています。（これは歴史的にはあり得ない。－訳者）ではなぜ摩訶迦葉ひとりだけが継承者となり、文殊は継承者になれなかったのでしょうか？文殊は釈尊やその直弟子たちの師でもあったのです。彼にはどうして後継者としての資格がなかったのでしょうか？

正法眼蔵涅槃妙心と言う言葉は小乗・声聞の向けの一つの方法ではないのですか？

　　　　　　　正法眼蔵涅槃妙心；ある時、鷲の峰での集会で釈尊が花をつまんで会衆に示したが、これを見て微笑したのが摩訶迦葉一人だった（＝拈華微笑）ので、釈尊は「我に正法眼蔵涅槃妙心あり、摩訶迦葉に付嘱す」と言った。釈尊の悟りの心境を示す言葉であろう。－訳者

この話はインドの経典にはなく、広く信じられるようになったのは宋の時代の中国からだと言う。禅そのものが中国で発展した流派なので、この話は中国で生まれた伝説とされる。－訳者

〔如浄〕君の言う通り文殊は釈尊の師なので、継承者にはなれない。もし彼が弟子なら、必ず継承者としただろう。また文殊の結集と言うのは一つの仮説であって、定説ではない。そして文殊が小乗の内容（教典、行動、人物、理論）を知らないなどとは考えられない。（＝小乗を人に任せるはずはない。）阿難陀は大乗、小乗ともに結集した。

阿難陀の時代には大乗は無い、したがって小乗もない。召集したのは摩訶迦葉であり、阿難陀の役目は釈尊の全説法の紹介だった。－訳者

　阿難陀は（釈尊の侍者だったので）ただ釈尊の説教を一番多く聞いた弟子（＝多聞第一）にすぎない。それで、釈尊の全説教を覚えていた。摩訶迦葉は釈尊の直弟子たちの中の長老であり、主席であり、最も勝れた弟子であった。だから釈尊の法（＝悟り）と同等のものを得たとの証明を得た。たとえ文殊にも同じ証明を与えたとしても疑問が残る（文殊は歴史上の人物ではない。－訳者）それはとにかく、釈尊の教えは（確実に）伝わっている。それを知り、信じるべきであり、表面的なことがらに疑問を持っても仕方がない。

　　　　　　　釈尊は教団経営（後継者、階級、任務分担など）には興味がなく、自分の得た涅槃妙心を人々に伝え、指導することに専念したらしい。彼は摩訶迦葉に印可を許したが、後継者に任命したことはなかった。－訳者

**25.**（質問なし）

　〔如浄〕君は椅子に掛けて足袋をはくやり方をしっているか？　－いいえ。どうすればよいのですか？－　座禅堂で座禅する時、椅子に掛けて足袋をはくには右袖で足を隠してはくのだ。そこに安置してある文殊菩薩像に無礼にならないように。

**26.** （質問なし）

　〔如浄〕座禅する時＊＊を食べるべからず。＊＊は熱を発するから。

　　　　　　　＊＊はそのような漢字が見付けられない。したがって意味不明。後注は別の漢字で説明してあるが、それはイネ科のマコモの実で食用。むしろ明和本にあるという胡椒の方が納得できる。－訳者

**27.**（質問なし）

　〔如浄〕風の当たる所で座禅してはいけない。

　　　　　　　五行気功も同じことを言っている。－訳者

**28.**（質問なし）

〔如浄〕座禅から立ち上がって歩く（＝経行）時は一呼吸に半歩とする。半歩を越えてはいけないし、必ず一呼吸をまもること（12.と46.を参照）。

**29.**（質問なし）

　〔如浄〕古い時代には座禅の時、を着ていた。まれにを着ている者もいたが、最近はみんな直綴を着ている。伝統の乱れだ。君が古風を良しとするなら褊衫を着る方がいい。今でも僧侶は宮中に招かれた時、法嗣として認められた時、また菩薩戒を受ける時にも褊衫を着る。褊衫は律院の人たちの服装だと言うのは間違いで、昔の規則を知らない人のいうことだ。

**30.**（質問なし）

　〔如浄〕私は出家以来、正色（＝青・黄・赤・白・黒）の衣を着たことがない。近頃、他所の寺の住職などは立派な法衣などを着て、世間の価値観に合わせているが、これでは仏教の実体はない。だから私はそんな美しい衣は着ないのである。

　釈尊は粗末な布の大衣だけを着て、他の美しい衣は着なかった。しかし、必ずしも粗末な衣を着なくてもよい。無理にも粗悪な衣を着るのは、これもまた外道である。アジタ・ケーサカンバラ（六師外道の一人、唯物論・快楽論の人、頭髪で作った上着を着ていた）がこれである。釈尊の弟子ならば、それに見合った服装をすべきである。ひとつの物を見ただけで、それだけが正しいと思ってはいけない。（釈尊は俗世で王子であったが、信者から立派な袈裟を贈られたからといって、それを着ていたわけではない。）衣に執着する者は小人である。糞掃衣（＝人が捨てた布で作った衣、糞とは無関係。へりくだった言い方だろう－訳者）は古来の習慣である。このことはよく覚えておくように。(**34.,47.**参照)

**31.**〔道元〕釈尊が金襴の袈裟を摩訶迦葉尊者に授けた（＝伝法の印）のは何時の事でしたか？

　〔如浄〕君のこの質問はもっとも好ましい。他の弟子たちはこのことを質問しないし、当然このことを知らない。これは善知識（＝賢人）たちの残念に思うところだ。私が、かって智鑑禅師（＝如浄禅師の師家）のところにいた時、このことを質問したところ、禅師は大いに喜んでくれた。

　釈尊は最初に摩訶迦葉が来て帰依するのを見た時、その場で彼に法の認可と金襴の袈裟（＝法衣。大衣、上衣、下衣）を与え、第一祖となされた。（釈尊は初祖で摩訶迦葉を第一祖という。－訳者）摩訶迦葉はこれを受けて、修行にはいり、怠ることがなかった。（粗末な衣を着て、托鉢し、閑居するほかに）うつ伏せに寝ない（頭北西面に寝る）。袈裟を着て釈尊を慕い、仏塔を思念して座禅にはげんだ。

　　　　　　　釈尊は生きているのだから、この仏塔と言うのは釈尊のものではない。しかも、釈尊の前の過去６仏は、後に作られた伝説だから、仏塔とは釈尊より先に死んだ直弟子たちのものか。－訳者

摩訶迦葉は仏陀であり菩薩である。釈尊は彼の来るのを見ると、いつも半座をあけて座らせた。それで彼が釈尊と並び座ることを会衆と天人たちは楽しみに見ていた。彼は（仏の３２相の中）３０相を具え、欠けるのは（＝眉間の白髪）と（頭頂の肉の隆起、ヘアースタイルが肉と間違えられたらしい。－後注）だけだった。

彼は、神通と智慧など一切の仏の力を持ち、釈尊の信頼を受けて、欠けたところはなかった。このようだったから、摩訶迦葉は釈尊に出会った最初に釈尊から法と袈裟を受けたのである。

　　　　　　人には、最初の出会いで力量を認められ信任を得ることがある。空海は恵果阿闍梨に「待っていたぞ」と言われ、すぐ法の伝授に取り掛かった。道元はすぐに学生主席の提案を受けた。釈尊と摩訶迦葉の出会いもそうであったと言う伝説があるようだ。しかし摩訶迦葉には「拈華微笑」の伝説もあり、これとの整合性があるのだろうか。－訳者

**32.**〔道元〕（寺院として）４種類の寺院があります。禅院、教院、律院および院のことです。（この中）禅院は釈尊の（本当の）後継者の寺院であり、菩提達磨を経て正法眼蔵涅槃妙心はこの系統に留まり、ここが釈尊の正しい法嗣であり、仏教の本山です。他の３院は枝葉にすぎず、（禅院に）比肩して対論できる資格はありません。

教院は中国・天台宗の観念を中心として成立し、智顗が南嶽慧思の後継者となって一心の三止三観を受けて、法華三昧、旋陀羅尼を理解した。ある知識に従うとは、ある経巻に従うことと言えます。私が諸先輩の残された業績を調べたところ、経律論を最も良く理解していたのは智顗であり、空前絶後と言えます。南嶽慧思は法を北斉の慧文から受け、慧思は根本禅を創設しました。慧文はその昔、手を背中に回して経巻を探りとり、竜樹の「中論」を得て、一心三観を確立しました。それにより現在、教院の教えと言われるものは、天台の教学になっています。慧文は「中論」を読むだけで、竜樹の意図する高さには届いていない、竜樹から印可を受けたわけでもないと思います。したがって、寺院の規則も、伽藍の構成も、法具の選定もまだ正式ではありません。

　今、教院では十六観の教室を持っていますが、その十六観は観無量寿経によります。しかもこの経の真偽は明らかではなく、研究者たちが疑問を呈しています。天台の一心三観はインドからの一つの手法、十六観と同じではないでしょう。十六観は（仏教の）権威で加えられた経典だと思います（真説ではない）。これは顕実師の説です.。（我々の）行き方とは天と地ほどもはるかにへだたり、水も火もないまぜになっています。（私が）思うにこれ貴国（＝宋）の学者が、まだ天台宗の考え方が良くわからなくて、みだりに十六観を持ち込んだのではないでしょうか。これで教院が釈尊在世中からの寺院の伝統を伝えていないことが明らかです。天台宗（が確立する）以前の寺は摩騰と竺法蘭の伝えたことを採用していると思います。

　　　　　　　禅院；禅の寺院。禅宗の僧は始め律院に寄宿していた。百丈懐海 (720~824) によって初めて清規が作られ、禅院が独立した。－後注。　「教外別伝」の言葉は、「教院」に対抗する意味で使われたのかもしれない。別の翻訳で「経外」と訳したが、意味の上では矛盾はないだろう。－訳者

　　　　　　　教院；三蔵の中、経（と論）を教える寺院であるか。－訳者

　　　　　　　徒弟院；法嗣とは言えないが、高弟に許して住職させた寺院。

　　　　　　　正法眼蔵；道元の主著。法の立場から仏教を説く。

　　　　　　　涅槃妙心；釈尊が摩訶迦葉に伝えた悟りの心。

　　　　　　　三止三観；止：止息・停止・不止。観：貫穿・観達・不観。

　　　　　　　一心三観；天台の観法。空観、仮観、中観を同時に冥想する。

　　　　　　　法華三昧；法華経の神髄を体得した境地。

　　　　　　　旋陀羅尼；？

　　　　　　　十六観；観無量寿経にある十六種の瞑想法。

　　　　　　　摩騰竺法蘭；迦葉摩騰と竺法蘭 (Dharmaratna) 伝説的人物。

　律院は南山道宣を起源とします。南山師はインド留学はしていません。わずかにインドから漏れてきた経典（＝律）を読んだだけです。たとえ天界の人が伝えた（と南山律師が自ら言っている）説を聞いたとしても、人間の賢者・聖人（＝菩提達磨をはじめインドから渡来してくる高僧たち）が親しく（手を取って）教えてくれた指導には及びません。だから、今、律院としてきらびやかに軒を並べている寺院の列を見ると、仏教を学ぶ人、修行する人の多くは「これで正統なのか」と疑いを持ちます。

　　　　　　　仏教徒は四種カーストの外だから、俗人のように贅沢品を持たない。その意味で禅僧の清貧は賞賛されていた。－訳者

　今、禅院と呼ばれる流れは、どこでも第一級の大寺院です。千人あまりの人々（＝座禅修行者、寺院運営者、耕作者など）を収容し、舎屋は百を超し、大小さまざまな殿舎を連ね、まるで宮廷のように（人々が行き交う）。これは釈尊の御言葉どおりのことなのでしょうが、必要によって設備を整え、足りなくなって建物を建てる。立派な建物を先に建ててから修行者を集めるものではありません。早朝から夜間の日課も初祖（＝菩提達磨）の直接の指導でしょう。教典によって意味を考えるだけの他宗とは違います。このように考えますが、これは正しいことでしょうか？

　私・道元の問うところを申し上げます。

　（真の）仏陀が世に出る時には、必ず先の仏陀の方法に従うと言います。そこで、ある時、釈尊は阿難陀に「君は七仏の方法に従いなさい。」といいました。

　　　　　　　このところは意味がわからない。七仏の法とは何か、それに従う者は誰か、何かの伝説によるものか？ －訳者

　七仏の法とは釈尊の法であります。釈尊の法とは過去六仏の法なのです。

七仏には釈尊も含まれるので、当然のこと。ただし、過去仏は伝説にすぎないので、別の伝説が必要。－訳者

　この後に２８代を経て菩提達磨尊者に到り、尊者は中国に入り、正しい法を正しく伝え、我々を迷いから救済しました。さらに５代を経て（六祖）慧能禅師に達し、彼は二人の勝れた法嗣を得ました。青原行思（曹洞宗の系統を生む）と南嶽懐譲（臨済宗の系統を生む）であり、彼らの後継者が、現在、善知識（＝賢者）として仏に代わって教化に努めております。彼らの住んだ場所にある寺院は、由緒正しい後継寺院と言えるでしょう。教院や律院と比べることも出来ない寺院です。たとえば、国家に二人の国王がいないことと同じでしょう。このことにお答えいただければ幸いです。

　〔如浄〕君が書面で質問してきたことは大変によろしい。文章も良く書けている。

　さて、昔は教・律・禅院の名前はなかった。今、三院となっているのは、末代のみだれと言うことだ。宮廷の役人は仏教を知らないので、かってに教僧、律僧、禅僧などと呼び分け、寺院に額を下賜するにも律寺、教寺、禅寺などと書く。（そのように）だんだんずれて行って、今では五輩の僧ということになっている。律僧は南山師の系統であり、教僧は (主に) 天台の出であり、瑜伽（＝真言）僧は不空三蔵から。徒弟僧は系統がはっきりしない。禅僧は菩提達磨の法脈に属する。

　　　　　　　徒弟僧；（＝高僧だったと言う理由で住職を許されたのだから、系譜に名前はなかったかもしれない。あるいは、一代限りだったか。師資相承の禅宗から見れば、正統ではないことになる）－訳者

　あわれなことだ、末代の辺地は（＝インドから見ての中国）。インドでも五師に分かれたが、仏法は一つであった（＝一仏心印）。当地の五僧では仏法が一つにはみえない。もし、国家に頭脳明晰な皇帝がいれば、このようなみだれは防げたかもしれない。

　　　　　　　中国の仏教は統制を国家に握られていた。如浄の景徳寺住職就任も国家の要請による。釈尊は仏教で国家の枠を超えたのに。－訳者

　良く知っておきなさい。今、禅院と称する寺院の建築様式、生活規律は菩提達磨師が自ら指導して決められた正当な直伝である。だから七仏の伝統は、この禅院にだけある。

禅院という名付けは不満だが、現行の戒律、法儀の一切は正式の伝統である。だからこそ、この寺院は仏教の中心であるのだ。律院や教院は枝葉にすぎない。したがってこの寺院を継ぐ者は法王である。国家に王あれば一切は王に所属する（ことは自明の理である）。

**33.**（質問なし）

　〔如浄〕仏弟子は、まず五蓋（＝５煩悩）を除き、次に（第）六蓋を除く。五蓋に無明蓋を加えて六蓋という。無明蓋を除くと言うことは、他の五蓋も除いたことを意味する。五蓋は除いたが、無明蓋を除いていないと言うことであれば、まだ釈尊の位には届いていないと

言うことだ。

　　　　　　　六蓋・無明蓋という蓋の分類はない。五蓋のついでに無明にも蓋をつけ

　　　　　　て数えたものと思う。－訳者

　〔道元〕これまで一度も今日のこのことを聞いたことがありません。（おそらく）長老、訪問修行者、私の同僚たちみんな聞いたことはないでしょう。ありがたいことに、特に師家の慈悲により今日のご教示をいただきました。今までの知識の上に更に積み上げること、幸甚と言うほかはございません。（ところで）五蓋、六蓋を除くのに何か秘訣がございましょうか？

　〔如浄〕君の今までの研究（＝工夫弁道）は何だったのだ？それが六蓋から離れる方法なのだ。釈尊も歴代の（禅の）後継者も悟りの段階（＝四向四果）を飛ばし、直接に悟りを伝えて五蓋・六蓋を離れ、五欲なんぞ笑い飛ばす。只管打坐こそは身心を脱落させ、五蓋（六蓋？）五欲を離れる方法なのだ。この他に別の方法は無い。一つもないから、二つ、三つとあるわけがない。

**34.**〔道元〕師家が住職となって今まで上等な衣を着ていないのはどういうことですか？

　〔如浄〕それは倹約（＝小欲知足）のためだ。釈尊と弟子たちが粗末な衣を着よう、粗末な鉢を使おうと思われたからだ。

**35.**〔道元〕他所の（住職の）方々が上等の衣を着ているのは、これは倹約ではなく、まだいくらかの欲が残っているのだと思います。ただし、禅師が上等の衣を着ているのは倹約していないとは言えないのではありませんか？

　　　　　　　宏智；看話禅側から沈黙の座禅を黙照禅と揶揄された禅師。

　〔如浄〕彼の場合はこれで倹約なのである。これには理由があってのことだ。君が郷里の日本で上等の衣を着ることは問題ない。私がここで上等の衣を着ないのは。付近の住職たちのように衣に執着する悪癖者と同種に見られたくないからだ。

　　　　　　　後注によると、道元禅師は生涯黒い衣で過ごされた。

**36.**（質問なし）

　〔如浄〕阿羅漢と縁覚の座禅（＝小乗禅）は、座禅以外に興味（＝著味）が無いとはいえ、（慈悲の）悲に欠ける。だから釈尊の大悲心（＝衆生の苦に対して憐れむ心）を第一として一切衆生を救済する座禅（＝大乗禅）とは違う。インドにおける外道の人もまた座禅（＝外道禅）をする。ではあるが、外道には必ず三つの患いがある。著味、邪見、憍慢のことだ。だから永遠に釈尊の座禅とは違う。（小乗の）声聞たちにも座禅がある。しかし声聞の座禅には慈悲心が薄い。存在者を理解するのに科学をもって分析し、真実の存在（＝諸法実相＝空）に到達せず、また自分自身の救済だけを計って仏教的慈悲を殺してしまう。それで永遠に釈尊の座禅と違っている。釈尊の座禅と言うのは、その最初（＝発菩提心）から衆生を忘れず、衆生を捨てず、昆虫にまで常に慈の心を持ち、救済（＝悲）することを誓い、あらゆる功徳をこれらに振り向ける（＝普廻向）。そのため、釈尊は常にこの世界（＝欲界）にあって座禅し努力する。欲界の中でも特に現在の我々の世界（他に3つの世界がある）に深くかかわり、転生しながら功徳を積んで、心が柔軟になっているからである。－心の柔軟とはどんなことですか？－　修行をきわめた僧たちの身心脱落をうながすこと、これが柔軟心である。彼らに仏の心印を伝えることだ。

**37.**（質問なし）

〔如浄〕法堂の法座の南の階段の東西（＝両側）に獅子の像がある。それぞれ階段の方を向いているが、顔は少し南に向いている。（＝階段の登り口の両側にあり、登ろうとする人を迎えるように、顔を向けている。）その像の色は白である。全体が白色で、髪、胴体と尾まで白一色。近頃、青髪にしている像があるが、これは口伝を知らないのだ。髪から尾まで全体が白でなければならない。

　法座の上の蓋（＝傘）は蓮華蓋という。蓮華が地を覆うように見えるから蓮華蓋という。八角になっている。八には八面の鏡や八種のがあり、幡には角ごとに鈴をかける。蓮華の葉は五枚、葉ごとに鈴をかける。この山（＝天童山・景徳寺）の法座の蓋がそれである。

**38.**〔道元〕先に、師家の「風鈴の頌」をうかがった時に、最初の句は「全身口に似て虚空に掛ける」（＝風鈴は全体が口で空中に吊るされる）。転句に「一等に他の為に般若（＝仏智）を談ず（＝もっぱら他の存在者のために般若を説教する）」と。いわゆる虚空とは虚空（＝）の色を言うのでしょうか？知らない者は必ず虚空の色というでしょう。近頃の修行者はまだ仏法を知らず、青い空を思い浮かべて虚空の色と思うのでしょう。まことにかわいそうなことです。

　　　　　　「風鈴頌」如浄禅師作

　　　　　　渾身似口掛虚空　不問東西南北風　一等為侘談般若　滴丁東了滴丁東

　　　　　　全身口に似て虚空に掛かる　東西南北の風を問わず

　　　　　　一等に侘びの為般若を談ず　 滴丁東（これは鈴の音）

　〔如浄〕虚空と言うのは般若のことだ。青空ではない。虚空（すなわち般若）は、青空に雲がかかるような不安定なものではなく、単なるではない。虚無を真実と見ることでもない。諸方の住職は法（＝存在の理法）すら良くわかっていない。まして「」を覚ることも出来ないだろう。（残念ながら）我が大宋国の仏法の衰微は覆うべくもない。

**39.**〔道元〕師家の「風鈴の頌」は、（私の）もっとも好ましいと思う教えの中で最上のものです。諸方の住職にはたとえ三万劫（＝宇宙の寿命３万回）の間、転生を繰り返しても（師家の頌の境地に）及ぶことはありません。（この寺では）禅の修行者たちは個々にお教えいただくことでしょう。私は遠くの、文化の果てる国（＝日本）に生まれ、学問不足ではありますが、伝灯・広灯・続灯・普灯（録）、あるいは諸先達の別録を読んでみても、未だかって師家の「風鈴の頌」に比肩するものはありませんでした。私はどうしたことか幸運に恵まれ今回（この「風鈴の頌」を）ご教示頂き、躍り上がるほど歓喜し、感涙に衣を潤し、昼夜礼拝して感謝しております。そうなってしまうのは、（この頌が）端直であり曲調もあるからなのです（＝飾りなく素直でありながら面白味も持ち合わせているからです）。

　〔如浄〕（駕籠に乗りこみながら、笑みを浮かべて）君は抜群に心が広い。私は清涼寺にいた時この頌を作ったのだった。皆がほめてくれたものだが、今までこれほど喜んでもらえたことは無かった。天童山の住職として、君にはものを見る眼があると認めよう（＝君に悟り<＝法の伝授>を認める）。君が頌を作る時にはこのように作るがよい。

**40.**（質問なし）

〔如浄〕生死流転（＝輪廻転生）する人間であっても、もし求道心を持てば釈尊の子（＝弟子）なのだ。私も一切衆生も（もともと）仏の子と言える。そうであるからには、父子の最初を尋ねてはいけない。

　　　　　　　「父子の最初」では意味が分からない。もし道元禅師の父親が誰かと言うことであれば「父親が誰であっても、釈尊の子（＝弟子）はそのことを気にしてはならない」ということか？道元禅師の父親が誰であるかは禅師も言っていないし、どこにも書き残した資料は無い。－訳者

**41.**（質問なし）

　〔如浄〕座禅する時は、舌を上あごに付ける、あるいは門歯の内側に付けてもよい。四五十年も座禅に慣れて、頭が下がり眠ると言うことが無い者は、眼を閉じても差し支えない。初心者は眼を開けて座禅すること。足が疲れたら左右を組み替えてもよい。これらのことは釈尊から(真っ直ぐ)数えて５０代（＝如浄は第五十世）の間に確かめられていることだ。

**42.**〔道元〕この国や日本で「今の禅院で行われている禅は小乗の禅ではないか」と言う者がいます。この非難にどう対処すべきですか？

　〔如浄〕そのような者はまだ仏教が良くわかっていないのだ。君は次のように知らなければならない。（すなわち）釈尊の正法は大乗、小乗を超えたものである。しかし昔の尊者たちは慈悲心をもって、大乗でも小乗でも相手に合わせて、優しく教えを説いたのである。大乗は７分、小乗は３分の教えにすぎない。それに、釈尊でも（世の親がするように）手でこぶしを作って何かを持っているように子供に見せかけて、だますようなことをしないわけではない。黄色くなった葉を小判だと言ったり、その場に合わせて指導する。きちんと指導することもある、サジをもて遊ぶ。月日をむなしく過ごし、過ごさせないためであった。

**43.**（質問なし）

〔如浄〕私が、君が座禅堂に居る時を見るに、昼夜眠らずに座禅している。これは大変良いことだ。（座禅中の姿を見ると）君はいづれ、世間には比較するものもない香気をもたらすだろう、これは吉兆だ。あるいは、「面前に当たって滴油の地に落ちるようなものが見える」「種々の触を発する」(この二つの喩の意味は不明。－訳者)のも、良い兆しといえる。（君は）このまま座禅弁道に精進せよ。

**44.**（質問なし）

　〔如浄〕釈尊の教えの中にあるのだが、（禅家にとって）教えを聞いたり、それについて考えたりすることはまだ補助的な修行であって、座禅こそが本分である。だから一秒でも一分でも座禅することの功徳は無量と言えるのだ。私は三十年あまり座禅し続けているが、決して退歩したとは感じない。今年六十五歳、老年になっていよいよ強くなっている。君も私のように努力するが良い。このことは釈尊がおっしゃた(＝金口)ことだ。

　　　　　　　釈尊の言葉は「」と表現される。－訳者

**45.**（質問なし）

　〔如浄〕座禅の時、壁・屏風などに寄りかかってはいけない。病を発することになる。

いつでも正身端坐すること。「普勧坐禅儀」に従うこと。違背してはならない。

**46.**（質問なし）

　〔如浄〕座禅を終って経行する時は、回り歩かない。直進する。(部屋の都合などで)二三十歩して引き返す時は必ず右回りして、左へは回らない。最初の一歩は右足から、そのあと左を進める。

　　　　　　　経行については、**12. 28.**を参照

**47.**（質問なし）

　〔如浄〕釈尊が経行なさった跡は、西インドのウダーナ国に残っている。維摩居士の家もまだ残っている。祇園精舎の礎石もまだうずもれてはいない。

　　　　　　　ウダーナ国はガンダーラの北、ここに仏足石と言う彫刻がある。

　　　　　　　維摩居士はビーシャリー国にいたとされる。家は方丈。

　　　　　　　祇園精舎はコーサラ国サーヴァッティ市（＝現サヘトマヘト）の南に遺跡がある。（後注による）

　これらの聖跡の寸法を測ると人それぞれで、どれが正しいかわからない。これは釈尊に対する人々の評価の混乱である。(あるいは、容易に正体を探らせない釈尊の攪乱である。－訳者)。良く知っておきなさい。インドからもたらされたという釈尊の衣鉢や消息など人が忖度してはならないことである。（真偽を疑わず、伝えられた伝説通りに受け止めておけ。それによって修行が左右されたり、自己の悟りに影響はない。－訳者）

　　　　　　　三界唯心と言われる仏教は、人間の心のみを追及するもの。科学的事実は問題外のことで、その事には気を使わない。そうでなければ、彼岸（＝仏の世界）などの存在は主張できない。なお、近代科学は人間を抜きにして物事を研究するもので、人間は観察者にすぎない。－訳者

　－道元は座から立って速礼し、頭を地につけて歓喜し落涙した。－

　　　　　　　速礼；五体投地の時、形式的に敷く座具なしで礼拝すること。－後注

**48.**（質問なし）

〔如浄〕冥想する時は、心を鼻の先（＝呼吸を整える）あるいは臍の下（＝ここにチャクラの一つがある）に落ち着けるなどと言うが、座禅では心は左手の上に置くのが釈尊から正しく伝わった手法である。（＝座禅では「法界定印」として腹の前に両手で輪を作る。その中に心を修める。－訳者）

**49.**（質問なし）

〔如浄〕薬山（薬山禅師の住した山）に居た沙弥（＝僧侶になる前の段階）の高は、具足戒（＝250戎、比丘戎。これを受けると正式に僧侶になる）を受けなかったけれど、釈尊から正しく伝わった仏戎を受けなかったとは言えない。（三帰依、三聚浄戎、十重禁戎の菩薩戎を受けていれば沙弥である－後注）そして袈裟を着け鉢をを持っていた。これを菩薩沙弥と言う。序列にも菩薩戎の年次であって、沙弥戎の年次ではない。これは正しい伝統である。君に求法の志が大きいことは私の喜びでもある。曹洞宗の委託するのは君(のような人)なのだ。

　　　　　　　菩薩戎を受ければ沙弥とあるが、それと沙弥戎は別なのか？－訳者

**50.**〔道元〕座禅弁学は古今の先達の勝れた行跡です。（ところが、僧侶となり）初心で利発な頃は、仏教の徒であると見えますが、人々を集めて講話する時には、仏法についてはあまり触れていないのが普通です。（仏教もその基礎には倫理・道徳があり、それはどの宗教でも共通する。－訳者）その後、悟りを得てからは、その悟りは（他人からは）見えなくても、（禅) を語る本人は、(心に) 古人を超えようとする気概（＝志気）を持ちます。それで、初心でもって仏道を得たとするか、悟りでもって得たとするか、どう考えればよいのでしょうか？

　〔如浄〕君の尋ねるところは、菩薩声聞（＝弟子）が釈尊に質問したことと同じである。このことについては、いつでもどこでも通用する正しい指示（＝解答）がある。もし法が不増不減（＝限定されたもの）ならば、どうやって（新しい僧侶は）菩提を手に入れる？ただ仏だけが菩提を知っていることになる。菩薩（＝僧侶）にはかかわりはない。これは（大いに）疑問だ。（＝僧侶と仏とは相いれない別物なのか？そうではないだろう。）諸先達の伝えるところによれば、(菩提を得るには)　ただ初心だけではいけない、初心から離れることでもない。どうしてそうなるか？その初心だけで菩提を得たとすれば、菩薩(＝修行者)は (その時) 仏であることになる。これはおかしい。しかし、もしその初心がなければ、（次の）第二、第三の心境と法の（より深い）存在が理解できない。したがって、悟りは初心を当初とし、初心は悟りを期待する。これをたとえで言うとすれば、灯心に火がともっているのは、始まりでもなく、始まりから離れたわけでもない。終わりでもなく、終わりがないわけでもない。連続して（＝不退不転）いて、新でもなく、古でもなく、自でもなく、他でもないということだ。灯は菩薩道、灯心は無明、炎は初心に相応する智慧である。釈尊は、一行三昧（＝只管打坐）と相応する智慧（＝明心）を修行して、無明という惑を焼き滅ぼすのに、初心でもなく、悟りでもなく、そのどちらからも離れることでもない (と言う)。これが釈尊直伝の禅(＝宗旨)である。

　　　　建長五年十二月十日、越の国吉祥山永平寺の方丈にあって、これを書写する。これは先師（＝道元）のご遺物の中にあった。まだ残りがあるのではないかと思えば、すべてを書写できなかったのではないかと恨めしい。悲涙を禁じ得ない。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　懐弉